特集　子どもと風

女の子たちの風車

黒須和清

風の力を利用するおもちゃといえば、たとえば、風車、凧、竹トンボ、グライダー……。どれもよく知られた伝承おもちゃで、作るのはとても簡単そうに思えます。でも、これらはちょっとのバランスの違いで成功と失敗にはっきり分かれますし、当日まで天候状態を心配していなければならず、なかなか大変……。私のような心配性の講師には単発の工作教室ではなかなかやれないネタなのであります。

でも、これらを作って遊ぶのがおもしろいことは間違いないのです。グライダーや竹トンボがふわりと風に乗って飛んでいった時の爽快感、凧にいたっては「揚がる」というよりも、空と引っ張りっこをしているような不思議な感覚を体験できます。

どんなに機械文明が発達しても、子どもたちにはずっとこのような快感を伝えてほしい。だから、子どもたちと継続的に過ごせる保育士や幼稚園教諭を目指す卵たちへの、私の授業の初回は「風車」から始まります。

私が、保育者養成校系の短大と専門学校で教えるようになって今年で六年目。最近は男子学生も増えてきましたが、九十パーセント以上は女子学生です。実は、私はこの年ごろの若い女の子が好きです。というか、彼女たちのおしゃれ感覚が大好きなのです。十代後半あたりの女の子たちのファッションの独創性……キラキラ、フワフワ、ファンシー、シック、ゴージャス、ドレッシー、パンク、さらに、おばちゃんが着るような渋いものや異国の奇抜なものなど、あらゆるジャンルのものを組み合わせて自分のスタイルをつくる彼女たちの「合わせ着ファッション」。これらは、和洋中華入り混じった食卓、そして初詣は神社、法事はお寺、でも、クリスマスも楽しむというわが国の「文化への柔軟性」が生み出した独自のおしゃれのスタイル、ほかのどの国の若い女の子にもないバランス感覚なのです。

身のまわりすべてを一つのブランドで統一することがおしゃれの基本といわれますが、それをあえて壊して「ごちゃまぜ」にする。決められた形のもの＝「サイン」（たとえば野球のサイン）という言葉に、「壊す」「否定する」「反対の」という意味の接頭語「デ」（デフォルメ、デメリットのデ・ですの）を付ける「デ・サイン（決まったものを壊すこと）」。それが「デザイン」の語源ですから、彼女たちは確実にそれを行っているわけです。そのパワーは、時にどんどん暴走します。ルーズソックスは巨大化し、厚底サンダルは高さを増し、小麦色茶髪の「コギャル」は、こげ茶色銀髪の「ヤマンバギャル」に進化します。

大人が意図的につくるブランドやブームではなく、彼女たちが独自につくる女の子文化は今日でも、日常生活に不便なまでに爪を飾る「ネイルアート」や、携帯電話を果てしなくキラキラビーズで埋め尽くす「デコ電」、紺色のスクールバッグをお気

に入りのぬいぐるみマスコットで飾り立てる「スクバ盛り」など、頼もしい暴走を続けています。
「それなのに……」私は首をかしげます。「こんなに創造と表現意欲のあふれたこの年ごろの女の子たちが、なぜ、こんなにも図工が嫌いなのだろう?」

六年前、初めてこの保育者の卵たちと出会った時の驚き。子どもたちに毎日楽しい体験を与えるプロである保育者にとって、図工の力は欠かせません。それを目指してくるのだから、当然図工は好きなはずと思っていたら、なんとクラスの三分の一以上が「図工が嫌い」「工作苦手」「私は不器用」と堂々と言ってくれるのです

これはおそらく、つまらなかった小中高時代の図工教育のせいだと私は思うのです。いや応なしに決められたテーマで描かされる、まねることが学びの基本なのに、友達のをまねてはダメ、自分の考えで作りましょうと強制されたり、「白いところを残さないように塗りましょう」などという不可思議な決まりがあったり、何でも好きなものを自由に描きなさいと言っておきながら、でも、好きなテレビアニメのキャラクターはダメという矛盾。あげくは、点数で「うまい」と「へた」にランクづけされてしまう（これらは、あくまでも私個人の味わった昔の図工の嫌だったことを並べただけです。念のため）。

幸い、私はそれにはめげず、家に帰ってから、紙や粘土で当時流行っていた大好きなウルトラマンの怪獣なんかを気ままに作っていましたから、「工作好き」の少年のまま大人になれたのでしょう。でも、きっとこの子たちはそこでめげて、そんなうっとうしいことが「図工」なんだと思ってしまったのではないでしょうか。こんなにも自己流のおもしろいおしゃれができるのに、なぜ作品作りでは萎縮してしまうんだろう。図工を嫌いと言ってしまうんだ

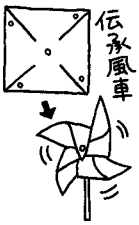
ろう。図工とは先生が望むいいものを作ることではないんだよ。作ることを楽しむことなんだよ。それは、おしゃれをすることとまったく同じことなのに。

私は長年、子どもたちのための手作りおもちゃを開発してきました。作り方の本などもいろいろ出してきましたが、「それらは、工作好きの少年たちのための本だったのじゃないかな」と、ふと思ったのです。どんなにていねいに説明して盛りだくさんにネタを載せても、最初から抵抗感をもっている彼女たちには逆効果じゃないのか。彼女たちには彼女たち向けの工作があるのではないか……。

「凧」「こま」「グライダー」「けん玉」「船」「鉄砲」「ロケット」「ロボット」……。なぜか、伝承手作りおもちゃは男の子向けのものが多いのです。でもこれらを女の子向けの仕様で展開し、若い女の子の嗜好に合わせた形で工作へのアプローチができれば、さらに、仕組みや動きの楽しさを充分伝えることができれば、そのほとんどが若い女の子である保育者の卵たちには魅力的な持ちネタになって、自然に意欲と興味のおもむくままに、まるでおしゃれを楽しむかのように、子どもたちにそれを伝えられるのではないだろうか……と思いました。

そんな私の「風車」の授業……まず、昔からの伝承風車を見せます。

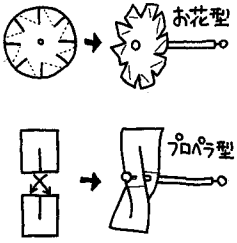
「正方形の紙の対角線に四隅から途中まで切り込みを入れて、一つおきに穴をあけて、そこをまとめて軸に通すと……。ほら回ります」と実演してみせると、学生たちから「わー！」と歓声があがります。こんな日本人の常識みたいなことで、今さら驚いてほしくはないのですが、この伝承風車の構造さえ知らないでいる子が、年々増えているのも情けない現実な



のです。が、めげずに私は続けます。

「これは伝承風車、簡単そうに見えるけど、実は、一番難しいんだ。優れたデザインだから今日まで残ってきている。でも、小さい子たちの風車工作体験での一番大事なことは、苦労してこの形の風車を作ることではないんだ。まずは、風でクルクル回る楽しさを体験させるということなんだよ、それには、もっと簡単な仕組みでよく回る、こんな風車があるんだよ」と、そこから二種類の風車を提案し製作させます。

紙皿のまわりにぐるりと切り込みを入れて折り立てる「お花型」と、切り込みを入れた二枚の四角い紙を交差させてつなぐ「プロペラ型」、これらはまったく無風の室内で、持って歩くだけでもくるくる回る高性能風車です。「童心」あふれる彼女たちが喜ばないわけがない。みんな、夢中で作り始めますが、ここまではほんの序の口……。その後におまけで提案する風車、それが、実は私の本題なのです。

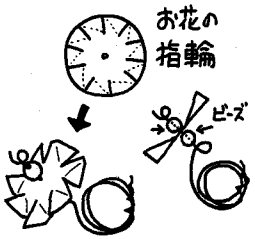


それは小さなお花の指輪、先ほど紙皿で作った「お花型」の応用編です。細い針金で作った指輪の先に二つのビーズで挟まれた小さな花型の風車。ふーっと吹くと小さな花びらがくるくる回ります。すると……、「わー、かわいいーっ！」という歓声と共に、大半が今作っている風車を途中でやめにして、われ先に、針金やビーズに群がって作り出します。「してやったり」の瞬間です。

五つ作って左手の指全部に飾って見せびらかす子、かばんや上着のボタン穴に付けて帰る子、今年の授業では、頭のおだんごヘアに友達みんなの花を

挿して気取った一人を、まわり中からケータイ軍団が撮影していました。風車体験を楽しんだ何よりの証拠です。

「かわいい！」と、彼女たちはよく言います。「何でもかわいいしか言わない」とその表現語彙の乏しさを嘆く方もいますが、彼女たちの放つ「かわいい」は単なる形容の表現ではなく、あらゆる文化を独自の審美眼にかけて評価し、それが自分の琴線に触れた時のその到達の合図なのです。彼女たちが「かわいい！」と言ってくれる工作が増えれば増えるほど、子どもたちにより多くの工作の文化が伝わっていくのではないかと思うのです。〝今日は何回「かわいい」と言わせられるか〟、それが私の密かな勝負です。



アンパンマンにミッキーマウス、キティちゃんにピカチュウにセーラームーン……。そんなきらびやかな文化に囲まれて育ってきて、それらが今でも大好きで、世界一ユニークなおしゃれができるこの国の女の子たちが、図工が苦手なわけがないと、私は信じているのです。

そして、授業もクライマックス……。

「凧は揚げてやる、グライダーは飛ばしてやる、風車は回してやる、空気としてそばに寄り添うだけでなく、常に動かす力になる、それが風なのだ。私は君たちにとっての風でありたい。そして同じように君たちは子どもたちへの風になってほしい」こんなキザなセリフを言って結びたいのですが……。みんな指輪作りに夢中で、誰も聞いちゃいないので、授業はいつもそのまま終わります。

ま、いいのです。楽しんでくれたなら……。

（手作りおもちゃ作家・洗足学園短期大学教授）